



Sun Fire™ X4100 サーバーおよび Sun Fire X4200 サーバーの設置マニュアル

対象機種 :

Sun Fire X4100
Sun Fire X4200
Sun Fire X4100 M2
Sun Fire X4200 M2

Sun Microsystems, Inc.
www.sun.com

部品番号 820-0734-10
2007年2月、改訂A

本書に関するコメントは、次の宛先までお送りください。<http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

Copyright 2006 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

米国 Sun Microsystems, Inc. (以降、米国 Sun Microsystems 社とします) は本書に記載されている技術に関連する知的所有権を所有しています。特に、これに限定されず、これらの知的所有権には、<http://www.sun.com/patents> に掲載されている 1 つまたは複数の米国特許、米国ならびに他の国における 1 つまたは複数の特許または申請中の特許が含まれます。

本書および本製品は、その使用、複製、再頒布および逆コンパイルを制限するライセンスに基づいて頒布されます。米国 Sun Microsystems 社またはそのライセンス許諾者の書面による事前の許可なくして、本書または製品のいかなる部分もいかなる手段および形式によっても複製することを禁じます。

本製品に含まれるサードパーティソフトウェア (フォントに関するテクノロジーを含む) は、著作権を有する当該各社より米国 Sun Microsystems 社へライセンス供与されているものです。

本製品の一部は、Berkeley BSD systems に由来し、University of California からライセンスを受けています。UNIX は、X/Open Company, Ltd. (の米国) ならびに他の国における登録商標で、X/Open Company, Ltd. が所有する独占的ライセンス供与権に基づいて、米国 Sun Microsystems 社にライセンス供与されています。

Sun, Sun Microsystems, Sun のロゴマーク, Java, AnswerBook2, docs.sun.com, Sun Fire, Sun Netra, Solaris は、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

SPARC の商標はすべて、ライセンス契約に基づいて使用されており、SPARC International, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標の付いた製品には、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャが採用されています。

OPEN LOOK および Sun™ グラフィカルユーザーインターフェースは、米国 Sun Microsystems 社がユーザーおよびライセンス被許諾者のために開発したものです。米国 Sun Microsystems 社は、ビジュアルまたはグラフィカルユーザーインターフェースの概念を先駆的に研究、開発し、コンピュータ業界に貢献した Xerox 社の努力を高く評価いたします。米国 Sun Microsystems 社は、Xerox グラフィカルユーザーインターフェースに対する非独占的ライセンスを Xerox 社から受けています。このライセンスは、OPEN LOOK GUI を採用する米国 Sun Microsystems 社のライセンス被許諾者に対しても適用されます。また適用されない場合でも、それらライセンス被許諾者は米国 Sun Microsystems 社のライセンス契約文書に遵守することとなります。

米国政府の権利 - 商用。政府関連のユーザーは、米国 Sun Microsystems 社の標準ライセンス契約、および FAR とその補足条項に従う必要があります。

本書は、「現状のまま」の形で提供され、法律により免責が認められない場合を除き、商品性、特定目的への適合性、第三者の権利の非侵害に関する暗黙の保証を含む、いかなる明示的および暗示的な保証も伴わないものとします。

Copyright 2006 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, Californie 95054, Etats-Unis. Tous droits réservés.

Sun Microsystems, Inc. a les droits de propriété intellectuelle relatants à la technologie qui est décrit dans ce document. En particulier, et sans la limitation, ces droits de propriété intellectuelle peuvent inclure un ou plus des brevets américains énumérés à <http://www.sun.com/patents> et un ou les brevets plus supplémentaires ou les applications de brevet en attente dans les Etats-Unis et dans les autres pays.

Ce produit ou document est protégé par un copyright et distribué avec des licences qui en restreignent l'utilisation, la copie, la distribution, et la décompilation. Aucune partie de ce produit ou document ne peut être reproduite sous aucune forme, par quelque moyen que ce soit, sans l'autorisation préalable et écrite de Sun et de ses bailleurs de licence, s'il y en a.

Le logiciel détenu par des tiers, et qui comprend la technologie relative aux polices de caractères, est protégé par un copyright et licencié par des fournisseurs de Sun.

Des parties de ce produit pourront être dérivées des systèmes Berkeley BSD licenciés par l'Université de Californie. UNIX est une marque déposée aux Etats-Unis et dans d'autres pays et licenciée exclusivement par X/Open Company, Ltd.

Sun, Sun Microsystems, le logo Sun, Java, AnswerBook2, docs.sun.com, Sun Fire, Sun Netra, et Solaris sont des marques de fabrique ou des marques déposées de Sun Microsystems, Inc. aux Etats-Unis et dans d'autres pays.

Toutes les marques SPARC sont utilisées sous licence et sont des marques de fabrique ou des marques déposées de SPARC International, Inc. aux Etats-Unis et dans d'autres pays. Les produits portant les marques SPARC sont basés sur une architecture développée par Sun Microsystems, Inc.

L'interface d'utilisation graphique OPEN LOOK et Sun™ a été développée par Sun Microsystems, Inc. pour ses utilisateurs et licenciés. Sun reconnaît les efforts de pionniers de Xerox pour la recherche et le développement du concept des interfaces d'utilisation visuelle ou graphique pour l'industrie de l'informatique. Sun détient une licence non exclusive de Xerox sur l'interface d'utilisation graphique Xerox, cette licence couvrant également les licenciées de Sun qui mettent en place l'interface d'utilisation graphique OPEN LOOK et qui en outre se conforment aux licences écrites de Sun.

LA DOCUMENTATION EST FOURNIE "EN L'ÉTAT" ET TOUTES AUTRES CONDITIONS, DECLARATIONS ET GARANTIES EXPRESSES OU TACITES SONT FORMELLEMENT EXCLUES, DANS LA MESURE AUTORISÉE PAR LA LOI APPLICABLE, Y COMPRIS NOTAMMENT TOUTE GARANTIE IMPLICITE RELATIVE A LA QUALITE MARCHANDE, A L'APTITUDE A UNE UTILISATION PARTICULIERE OU A L'ABSENCE DE CONTREFAÇON.



Adobe PostScript

目次

はじめに v

1. サーバーハードウェアのセットアップ 1
 - 設置の概要 1
 - スライドレール（オプション）によるサーバーのラックへの取り付け 2
 - 取り付け前のスライドレールの分解 3
 - 固定用ブラケットのサーバーへの取り付け 4
 - スライドレールアセンブリのラックへの取り付け 5
 - サーバーのスライドレールアセンブリへの取り付け 6
 - ケーブル管理アセンブリの取り付け 7
 - ケーブルの接続と配線 11
 - スライドレールと CMA の動作確認 12
 - ケーブル配線 13
 - サーバーの電源投入と電源切断 15
 - サービスプロセッサの初期設定のためのスタンバイ電源適用 15
 - 主電源モードでの電源投入 16
 - 主電源モードのシャットダウン 17

2.	サーバーソフトウェアのセットアップ	19
	Integrated Lights Out Manager の概要	19
	ILOM サービスプロセッサへの接続	21
	シリアル接続を使用した ILOM への接続	21
	イーサネット接続を使用した ILOM への接続	23
	DHCP を使用した ILOM イーサネットの設定	23
	静的イーサネット設定を使用した ILOM の設定	26
	プラットフォームオペレーティングシステムおよびドライバソフトウェアのセットアップ	29
3.	プリインストールされている Solaris 10 オペレーティングシステムの設定	31
	開始前のご注意	31
	インストールのためのワークシート	32
	プリインストールされた Solaris 10 オペレーティングシステムの設定	35
	サービスプロセッサの IP アドレスを使用したサーバーとの接続	36
	コンソール出力のビデオポートへのリダイレクト (省略可)	37
	シリアルキャプチャプログラムを使用したサーバーとの接続	38
	Solaris 10 ユーザーマニュアル	39
	Solaris 10 ソフトウェアのダウンロード	39
	Solaris 10 OS のトレーニング	39
	索引	41

はじめに

この『Sun Fire X4100 サーバーおよび Sun Fire X4200 サーバーの設置マニュアル』では、サーバーをラックに取り付ける手順をはじめ、ケーブル配線やサーバーの電源投入の手順について説明します。また、サービスプロセッサの管理者アカウントへの接続手順についても説明します。さらに、プリインストールされた Solaris 10 ソフトウェアの設定についてや、サポートされている他のオペレーティングシステムのインストールについて説明しているマニュアルへのリンクも記載されています。

関連ドキュメント

Sun Fire X4100 サーバーおよび Sun Fire X4200 サーバーのドキュメントセットの説明については、システムに付属している『ドキュメントの場所』シートを参照するか、製品のドキュメントサイトをご覧ください。次の URL を参照し、ご使用の製品のページに移動してください。

<http://www.sun.com/documentation>

これらのドキュメントの一部については、上記の Web サイトでフランス語、簡体字中国語、繁体字中国語、韓国語、日本語の翻訳版が入手可能です。英語版は頻繁に改訂されており、翻訳版よりも最新の情報が記載されています。

Sun ハードウェアのすべてのドキュメントについては、次の URL を参照してください。

<http://www.sun.com/documentation>

Solaris およびその他ソフトウェアのドキュメントについては、次の URL を参照してください。

<http://docs.sun.com>

製品のアップデート

Sun Fire X4100 サーバーまたは X4200 サーバー製品のアップデートのダウンロードについては、次の Web サイトをご覧ください。

<http://www.sun.com/servers/entry/x4100/downloads.jsp>

これらのサイトから、ファームウェアとドライバのアップデート、および CD-ROM .iso イメージをダウンロードできます。

UNIX コマンドの使い方

本書には、基本的な UNIX[®] コマンドや、システムのシャットダウンや起動、デバイスの設定などの手順に関する情報は記載されていないことがあります。このような情報については、次のマニュアルを参照してください。

- システムに付属のソフトウェアマニュアル
- 次の場所にある Solaris[™] オペレーティングシステムのドキュメント

<http://docs.sun.com>

サードパーティーの Web サイト

Sun 社は、本書で言及しているサードパーティーの Web サイトの利用については責任を負いません。また、当該サイトまたはリソースから入手可能なコンテンツや広告、製品またはその他の素材を推奨したり、責任あるいは法的義務を負うものではありません。さらに、他社の Web サイトやリソースに掲載されているコンテンツ、製品、サービスなどの使用や依存により生じた実際の、または疑わしい損害や損失についても責任を負いません。

表記上の規則

字体*	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、および画面上のコンピュータ出力を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 % You have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力とは区別して示します。	% su Password:
AaBbCc123	書名、新しい用語、強調する語句、および変数を示します。変数の場合には、実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	『User's Guide (ユーザーズガイド)』の第 6 章を参照してください。 これらはクラスオプションと呼ばれます。 これを行うには、スーパーユーザーである必要があります。 ファイルを削除するには、rm <ファイル名> と入力します。

* ご使用のブラウザの設定によっては、表示内容が多少異なる場合もあります。

コメントをお寄せください

Sun 社は、ドキュメントの改善を常に心がけており、皆様のコメントや提案を歓迎いたします。コメントは次のサイトを通してお送りください。

<http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

フィードバックには、本書のタイトルと部品番号の記載をお願いいたします。

『Sun Fire X4100 サーバーおよび Sun Fire X4200 サーバーの設置マニュアル』、部品番号 820-0734-10

サーバーハードウェアのセットアップ

この章では、次の項目について説明します。

- 「[設置の概要](#)」 (1 ページ)
- 「[スライドレール \(オプション\) によるサーバーのラックへの取り付け](#)」 (2 ページ)
- 「[ケーブル配線](#)」 (13 ページ)
- 「[サーバーの電源投入と電源切断](#)」 (15 ページ)

注 – 本書の情報は、特に説明がない限り、オリジナルの Sun Fire X4100 サーバー、Sun Fire X4200 サーバー、Sun Fire X4100 M2 サーバー、Sun Fire X4200 M2 サーバーに適用されます。

設置の概要

サーバーを開梱したら、本書の指示に従って次の作業を行ってください。

1. スライドレール (注文可能) を使って、サーバーをラックに取り付けることもできます。本書の「[スライドレール \(オプション\) によるサーバーのラックへの取り付け](#)」 (2 ページ) を参照してください。
2. すべてのケーブル、周辺機器、および電源コードを接続します。サーバーの後面パネルのコネクタポートの図については、本書の「[ケーブル配線](#)」 (13 ページ) を参照してください。
3. 本書の「[サーバーの電源投入と電源切断](#)」 (15 ページ) の指示に従って、サーバーの電源をオンにし、ブートします。
4. 本書の第 2 章の説明に従って、サービスプロセッサに接続します。

5. インストール済みの Solaris™ オペレーティングシステムを設定するか、必要に応じて、サポートされているオペレーティングシステムをインストールします。詳しくは、本書の「[プリインストールされた Solaris 10 オペレーティングシステムの設定](#)」(35 ページ)、『Sun Fire X4100 サーバーおよび Sun Fire X4200 サーバーのオペレーティングシステムインストールガイド』(820-0739)、または『Sun Fire X4100 サーバーおよび Sun Fire X4200 サーバーの Windows オペレーティングシステムインストールガイド』(820-0744) を参照してください。
6. 必要に応じて、サーバーをカスタマイズします。詳しくは、オンライン情報システムの「System Management (システム管理)」セクションまたは『Sun Fire X4100 and Sun Fire X4200 Integrated Lights-Out Manager Administration Guide (Sun Fire X4100 サーバーおよび Sun Fire X4200 サーバーの Integrated Lights-Out Manager 管理ガイド)』を参照してください。

スライドレール (オプション) によるサーバーのラックへの取り付け

スライドレール (別注品) を使ってサーバーを標準ラックに取り付ける場合は、次の手順で取り付けてください。これらのスライドレールは、Sun Fire™ X4100 サーバー、Sun Fire X4100 M2 サーバー、Sun Fire X4200 サーバー、Sun Fire X4200 M2 サーバーで使用できるよう設計されています。これらのスライドレールは、次の仕様を満たす標準ラックに対応しています。

- 前後左右で固定する形式の 4 支柱ラック。2 支柱のラックにはマウントできません。
- 1U の幅と高さが ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 に適合すること。
- 前方と後方の支柱の間隔が 610 ~ 915 mm (24 ~ 36 インチ) であること。
- 前方の支柱とキャビネット前面ドアとの間に 25.4 mm (1 インチ) 以上の間隔があること。
- 前方の支柱とキャビネット後面ドアとの間に 800 mm (31.5 インチ) 以上の間隔があること。ただし、ケーブル管理アームを取り付けない場合には 700 mm (27.5 インチ) でかまいません。
- 前方の支柱と後方の支柱との間にある構造サポートとケーブルスルーとの距離が 456 mm (18 インチ) 以上であること。

注 - 図には、Sun Fire X4100 サーバーおよび Sun Fire X4100 M2 サーバーの写真が使用されていますが、ここで説明する手順は Sun Fire X4200 サーバーおよび Sun Fire X4200 M2 サーバーにも適用されます。



注意 - サーバーは必ず下から先にラックへ取り付けてください。上から順に取り付けるとラックが不安定になり、転倒する危険が生じます。転倒防止機構を装備しているラックであれば、サーバー取り付け時に活用してください。

取り付け前のスライドレールの分解

取り付けに備えて、次の手順でスライドレールアセンブリから固定用ブラケットを取り外してください。

1. スライドレールの梱包を解きます。
2. スライドレール内部の固定用ブラケットの先端にあるスライドレールロック（[図 1-1](#)を参照）を確認します。
3. ロックの上下にあるタブを同時に押し込みながら、固定用ブラケットをスライドレールから完全に引き出します。[図 1-1](#)を参照してください。
4. 固定用ブラケットの側面にある固定用ブラケットリリースボタンを[図 1-1](#)に示す方向にスライドさせ、スライドレールから固定用ブラケットを引き抜きます。
5. 以上の分解作業を、残りのスライドレールに対してそれぞれ行います。

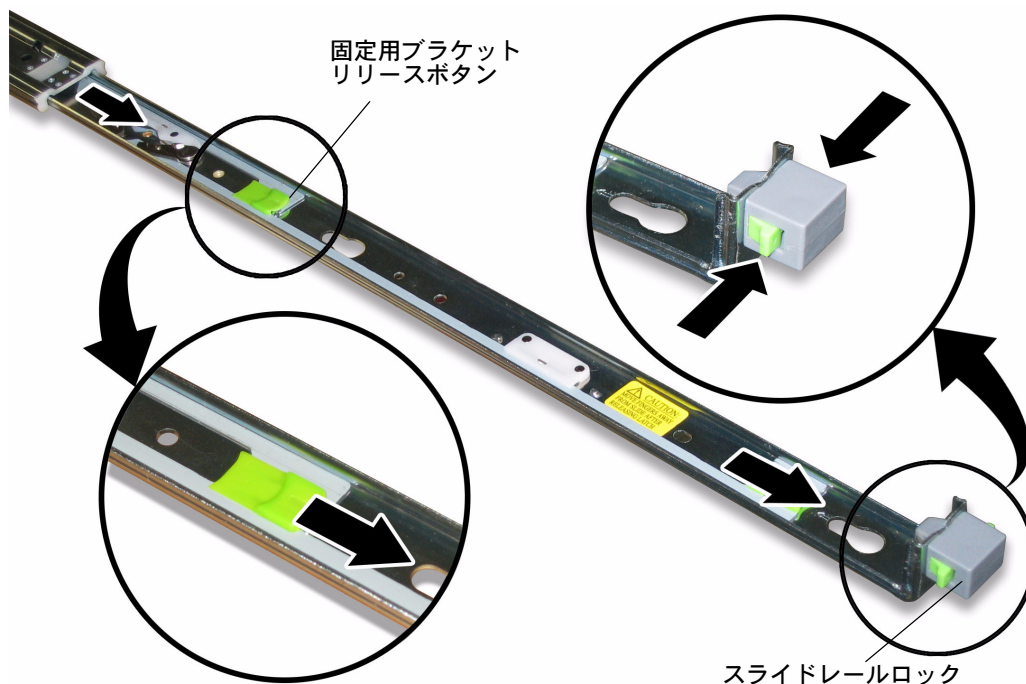


図 1-1 取り付け前にスライドレールを分解する

固定用ブラケットのサーバーへの取り付け

次の手順で、分解した固定用ブラケットをサーバー筐体に取り付けてください。

1. スライドレールロックがサーバーの前面を向くように固定用ブラケットを配置し、サーバー側面にある3個の爪が固定用ブラケットの開口部と合致することを確認します。図 1-2 を参照してください。

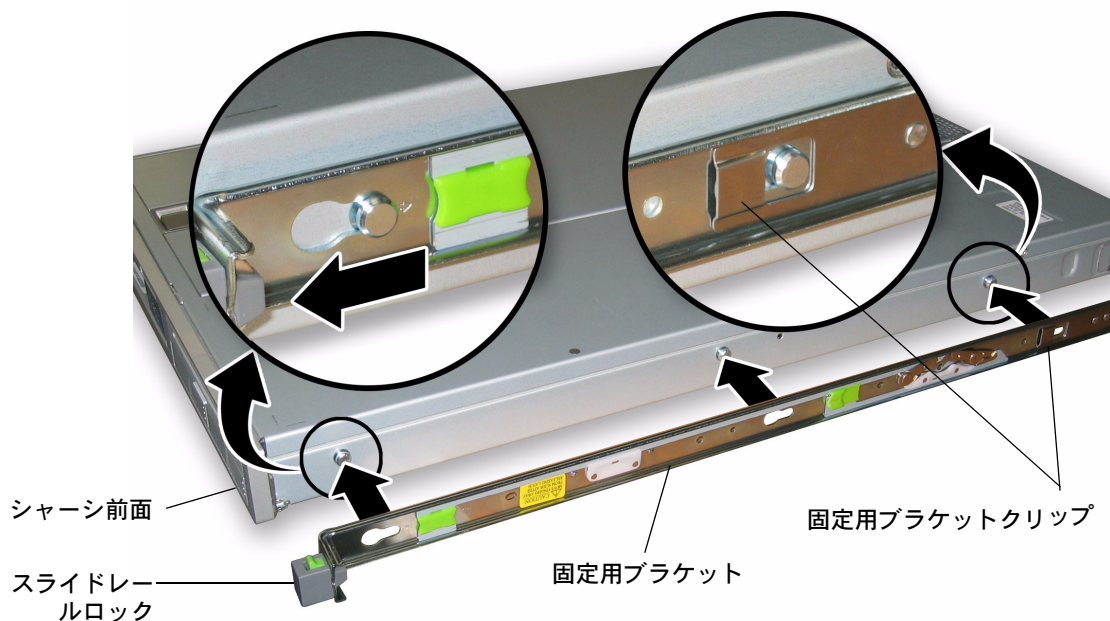


図 1-2 固定用ブラケットとサーバーシャーシの位置を合わせる

2. サーバー側面の爪が3個とも固定用ブラケットの開口部から突き出ている状態で、固定用ブラケットをサーバー前面方向に「カチッ」と音がするまでスライドさせます。図 1-2 を参照してください。
3. 3個の爪が開口部に合致しており、最後尾の爪が固定用ブラケットクリップに正しく接続されていることを確認します。図 1-2 を参照してください。
4. 同様の手順で、サーバーの反対側にも固定用ブラケットを取り付けます。

スライドレールアセンブリのラックへの取り付け

次の手順で、スライドレールアセンブリをラックに取り付けてください。

1. サーバーの取り付け位置を決め、両端にあるブラケット前方後方共にラックの支柱の外側に来るようにスライドレールアセンブリを配置します。図 1-3 を参照してください。
2. スライドレールアセンブリをラックの支柱に固定します。
スライドレールの取り付け方法は、ラックの種類に応じて多少異なります。
 - ラック支柱のネジ穴がねじ切りされているタイプのラックでは、適合するサイズのネジをブラケット側から支柱にねじ込んでスライドレールを固定します。
 - ねじ切りされていないタイプのラックでは、ブラケットと支柱の穴の位置を合わせて適当な大きさのネジを差し込み、支柱の裏側から固定ナットをねじ込んでスライドレールを固定します。



図 1-3 スライドレールアセンブリをラックの支柱に取り付ける

3. 以上の分解作業を、残りのスライドレールに対してそれぞれ行います。

サーバーのスライドレールアセンブリへの取り付け

次項では、固定用ブラケットの付いているサーバーをラックに取り付けたスライドレールアセンブリに組み込む手順について説明します。



注意 – サーバーの組み込み作業は 2 人以上で行ってください。サーバーにはかなりの重量があるため、1 人で作業を行うと装置または人体に危害を与える恐れがあります。

1. スライドレールアセンブリを一番奥まで押し込みます。
2. サーバーを (2 人以上で) 持ち上げ、サーバー後面の固定用ブラケットの先端をラック中のスライドレールアセンブリと同じ高さに合わせてください。図 1-4 を参照してください。
3. 左右の固定用ブラケットを同時にスライドレールに差し込み、固定用ブラケットの先がスライドレールストップにあたるまで 30cm (12 インチ) ほど押し込みます。

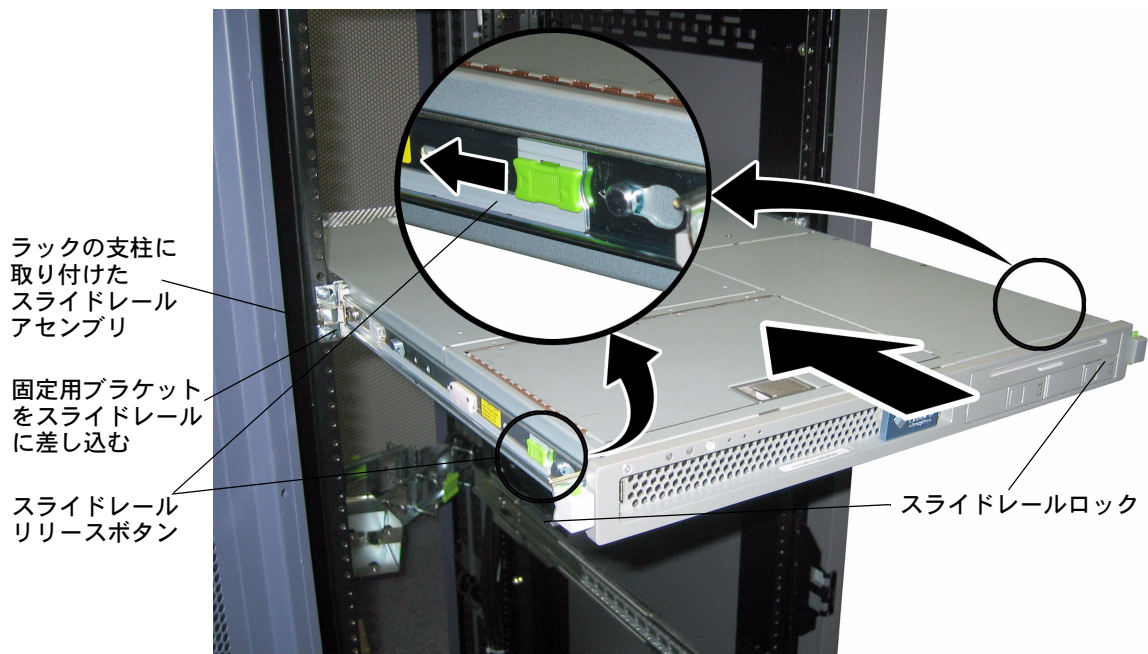


図 1-4 固定用ブラケットの付いたサーバーをスライドレールに組み込む

4. 左右の固定用ブラケットのスライドレールリリースボタンを手前に引きながら、サーバーをラックの奥へ向けて押し込みます。図 1-4 を参照してください。サーバー前面の固定用ブラケットがスライドレールにロックされてから手を離します。



注意 – サーバーがラックに正しくマウントされ、スライドレールロックがブラケットをしっかり保持していることを確認してください。

ケーブル管理アセンブリの取り付け

オプションのケーブル管理アセンブリ（CMA）を取り付ける場合は、次の手順で作業を行ってください。

1. 製品パッケージからCMAキットを取り出します。
2. CMAキットを持ってラックの背面へ回り、サーバーの背後に十分な取付け空間があることを確認します。

注 – 次の説明では、作業員がラックの背後に立ってサーバー背面に正対していることを前提として「右」「左」を指示します。

3. CMA レールエクステンションを左側のスライドレールに差し込んで「カチッ」という音がするまで押し込みます。図 1-5 を参照してください。

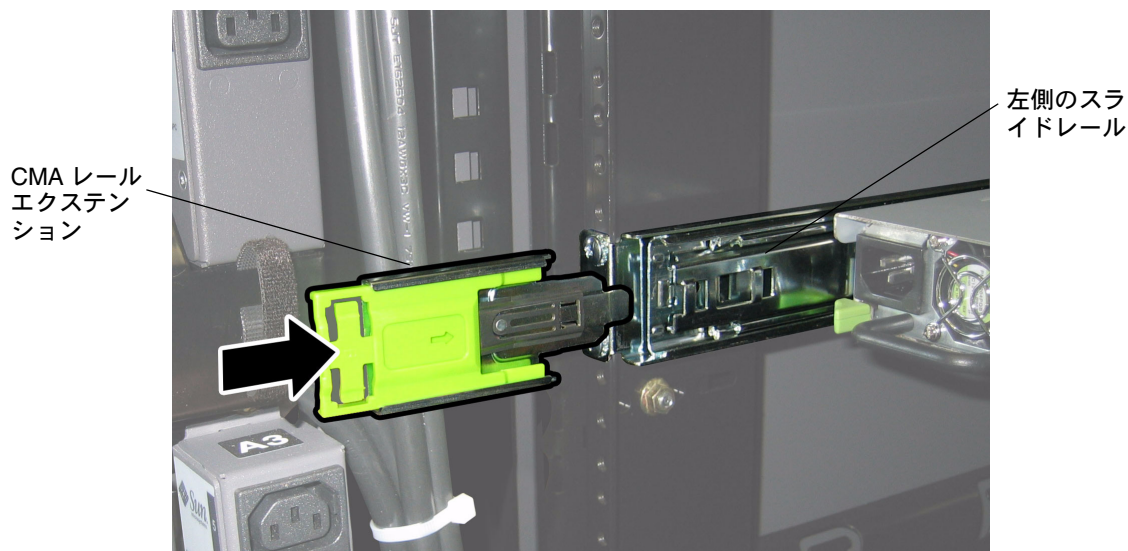


図 1-5 左側のスライドレールに CMA レールエクステンションを挿入する

4. CMA レールエクステンションを固定位置まで押し込みます (図 1-6 を参照)。



図 1-6 左側のスライドレールに正しく装着された状態の CMA レールエクステンション

注 - 以下の作業ステップは、CMAを手で保持しながら行ってください。CMA が 3 点で固定されるまでは、どのコネクタのヒンジにも重量負荷がかからないようご注意ください。

5. CMA の固定用ブラケットコネクタを右側のスライドレールに差し込み、「カチッ」と音がして固定されるまで押し込みます。図 1-7 を参照してください。

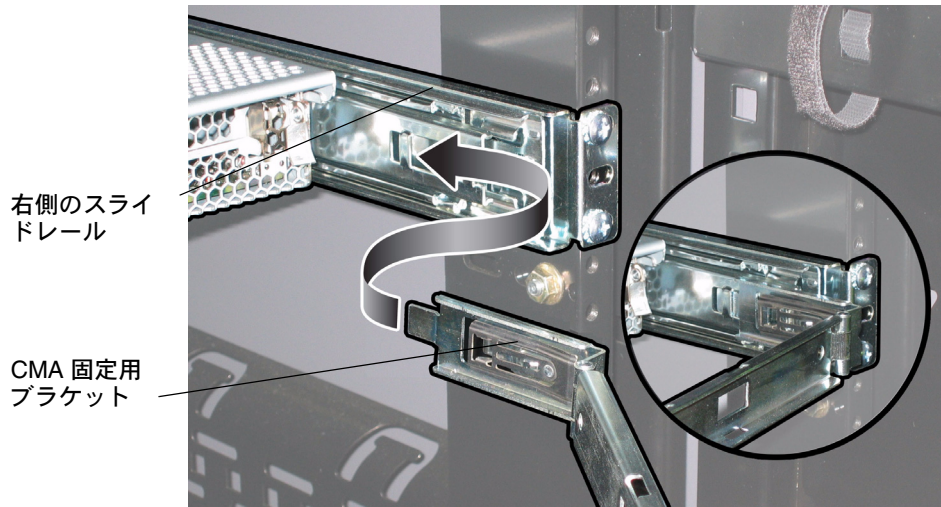


図 1-7 右側のスライドレールの後ろに CMA 固定用ブラケットを挿入する

6. 右側の CMA のスライドレールコネクタを右側のスライドレールアセンブリに差し込み、「カチッ」と音がして固定されるまで押し込みます。図 1-8 を参照してください。

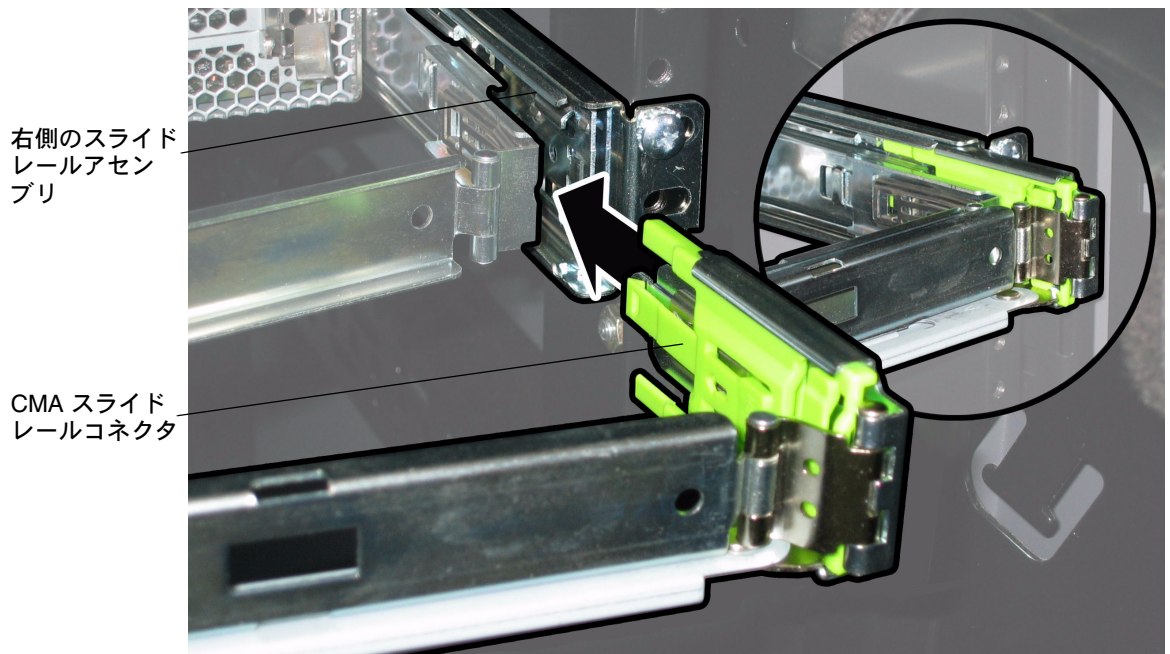


図 1-8 右側のスライドレールアセンブリの後ろに CMA スライドレールコネクタを挿入する

7. 残りの CMA アームコネクタを、[ステップ 3](#) で左側のスライドレールに取り付けた、CMA レールエクステンションのプラスチックの切り込み部分に挿入します。[図 1-9](#) を参照してください。

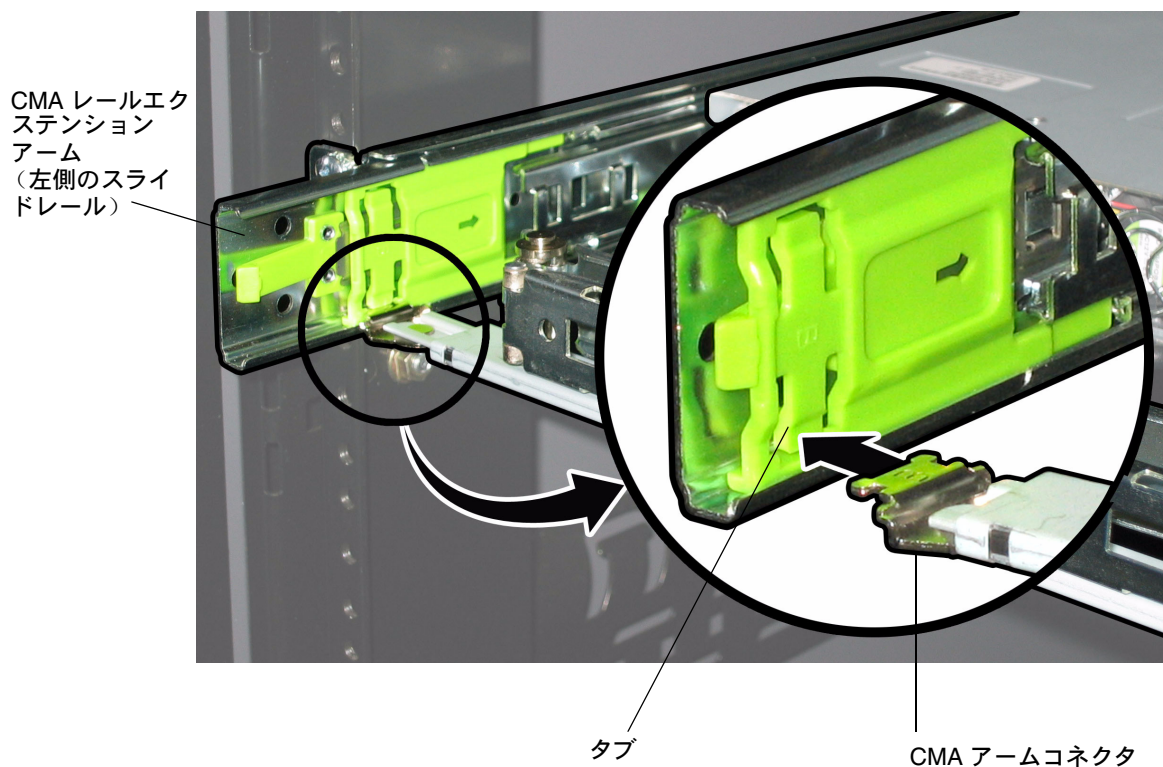


図 1-9 CMA アームをレールエクステンションコネクタに差し込む

8. タブを[図 1-9](#) で示す方向にゆっくりと押して、コネクタを挿入できるように切り込み部分を広げます。その切り込み部分へコネクタを押し込むと、タブを放すことでコネクタが定位置に固定されます。
9. CMAの適切な固定穴にケーブルハンガーを配置し、所定の位置に「カチッ」とはめます。[図 1-10](#) を参照してください。



CMA ケーブルハンガー

CMA アーム

図 1-10 CMA ケーブルハンガーを取り付ける

ケーブルの接続と配線

次の手順に従ってケーブルをサーバーに接続し、CMA を通して配線します。

1. サーバー後面パネルのポートの図とケーブルをサーバーに接続する手順については、「[ケーブル配線](#)」(13 ページ) を参照してください。
2. 必要に応じて、ケーブルをサーバーに接続します。
3. CMA ケーブルハンガーを通してケーブルを配線します。

スライドレールと CMA の動作確認

この手順に従って、スライドレールと CMA が正しく動作していることを確認します。

注 – この作業は、2 人で行うことをお勧めします。1 人がサーバーをラックから出し入れし、もう 1 人がケーブルと CMA を観察します。

1. スライドレールがストッパに当たるまで、サーバーをラックからゆっくりと引っ張り出します。
2. 接続されているケーブルが、引っかかったり、ねじれていないか点検します。
3. CMA がスライドレールから完全に伸びていること、スライドレールに留まっていないことを確認します。
4. 次の説明に従って、サーバーをラックに押し戻します。

サーバーが完全に伸びたら、2 セットのスライドレールストッパを開放して、サーバーをラックに戻す必要があります。

 - a. 最初のストッパのセットはレバーで、各スライドレールの内側、サーバーの後面パネルのすぐ後にあります。これらのレバーには「PUSH」というラベルが付いています。両方のレバーを同時に押して、サーバーをラックの方にスライドさせます。サーバーは、約 38cm (15 インチ) 移動して止まります。

次の作業を続ける前に、ケーブルと CMA が、引っかかることなく引き込めることを確認します。
 - b. ストッパの第 2 セットはスライドレールリリースボタンで、各固定ブラケットの前面近くにあります。図 1-4 を参照してください。両方のスライドレールリリースボタンを同時に押すか、引っ張って、両側のスライドレールのロックがかかるまで、サーバーをラックに完全に押し込みます。
5. 必要に応じて、ケーブルハンガーと CMA を調整します。
6. 「ケーブル配線」(13 ページ) に進みます。

ケーブル配線

必要に応じて、ケーブルをサーバーの後面パネルコネクタに接続します。図 1-11 または図 1-12 を参照してください。

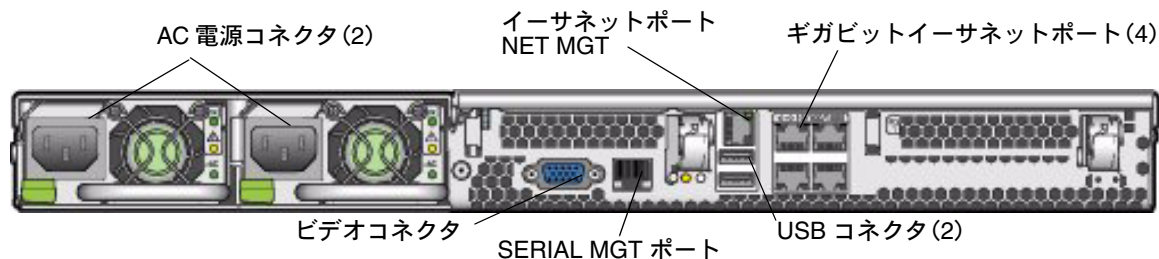


図 1-11 Sun Fire X4100 サーバーおよび Sun Fire X4100 M2 サーバーの後面パネル

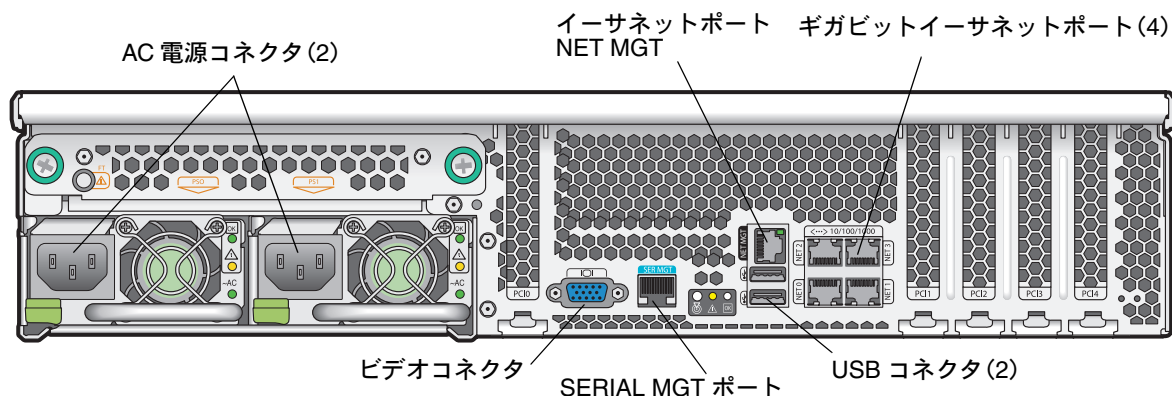


図 1-12 Sun Fire X4200 サーバーおよび Sun Fire X4200 M2 サーバーの後面パネル

1. 必要に応じて、USB キーボードケーブルを USB コネクタに接続します。
2. 必要に応じて、USB マウスケーブルを USB コネクタに接続します。
3. 必要に応じて、ビデオモニターケーブルをビデオコネクタに接続します。

注 – キーボード、マウス、ビデオは、ヘッドレス操作をサポートするオペレーティングシステムのオプションです。

4. お使いのギガビットイーサネットまたは管理ネットワークには、必要に応じて、イーサネットケーブルを「NET」コネクタに接続します。
 - ラベルが「NET 0」から「NET 3」のコネクタは、ギガビットイーサネットポートです。
 - ラベルが「NET MGT」のポートは、10/100 イーサネットポートで、システムを管理ネットワークに接続できます。
5. 必要に応じて、RJ-45 シリアルポートケーブルを「SERIAL MGT」コネクタに接続します。

シリアルポートおよびシリアルポートのケーブル配線に関して次の考慮事項にご留意ください。

 - デフォルトのシリアルポート速度は、フローコントロールなしの 9600 ボーです。
 - 対象サーバーはすべて、Sun Netra™ などの Sun Fire システム上で RSC、ALOM、ALOM Plus カードの RJ45 ポートと同じピン配列を使用します。
 - 互換性のある Sun RJ45-to-DB9 アダプタ（部品番号 530-3100）がサーバーと一緒に出荷されます。
 - それ以外に互換性のあるケーブルには、CISCO 72-3383-01 コンソールケーブルがあります。
6. 「サーバーの電源投入と電源切断」（15 ページ）に進みます。

サーバーの電源投入と電源切断

この時点では、サービスプロセッサの初期設定を実行できるように、サーバーにスタンバイ電源のみを適用する必要があります。このセクションでは、主電源モードをオンにする手順およびシャットダウンする手順の両方について説明します。

サービスプロセッサの初期設定のためのスタンバイ電源適用

この手順で、初期設定の前にサービスプロセッサ (SP) をスタンバイ電源にします。



注意 – 必ず、ファン、コンポーネントヒートシンク、エアバッフル、カバーをすべて取り付けて、サーバーを操作してください。適切な冷却メカニズムがない状態で操作すると、サーバーのコンポーネントに深刻な損傷が生じることがあります。

1. 接地 AC 電源コードを、サーバー後面にある AC 電源コネクタと接地 AC 電源コンセントに差し込みます。

スタンバイ電源モードでは、前面パネルの電源/OK LED が点滅し、SP が機能していることを示します。LED の位置については、[図 1-13](#) または [図 1-14](#) を参照してください。

注 – この時点では、スタンバイ電源は、Graphics Redirect and Service Processor (GRASP) ボードと電源ファンにのみ供給されます。本書の第 2 章に進み、初期設定を開始してください。プラットフォームのオペレーティングシステムをインストールする準備が整うまで、主電源をサーバーのほかの部分には入れないでください。

2. 本書の第 2 章の指示に従って、ソフトウェアの初期セットアップの作業に進んでください。

主電源モードでの電源投入

- すべてのサーバーコンポーネントの主電源を投入するには、次の手順に従います。
 - a. 電源コードが接続され、スタンバイ電源がオンの状態であることを確認します。
スタンバイ電源モードでは、前面パネルの電源/OK LED が点滅します。図 1-13 または図 1-14 を参照してください。
 - b. 前面パネルにある、へこんだ電源ボタンをボールペンなどの先の尖ったもので押しします。
主電源がサーバー全体に供給されると、電源ボタンのとりにある電源/OK LED が点灯し続けます。



図 1-13 Sun Fire X4100 サーバーおよび Sun Fire X4100 M2 サーバーの前面パネル

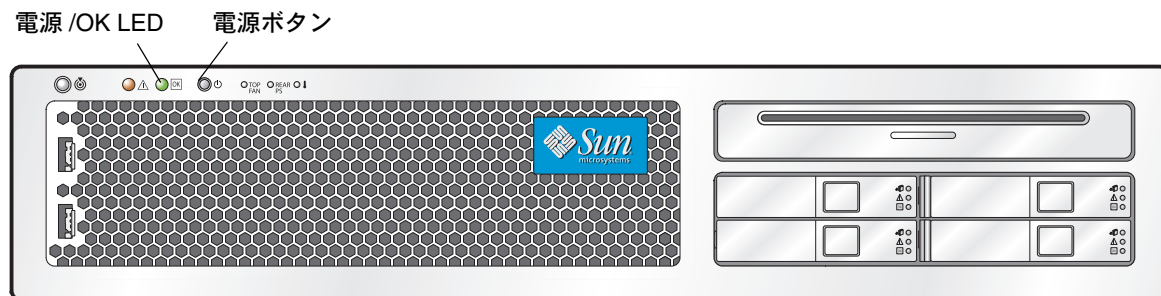


図 1-14 Sun Fire X4200 サーバーおよび Sun Fire X4200 M2 サーバーの前面パネル

主電源モードのシャットダウン

- 主電源モードからサーバーの電源をオフにするには、次の 2 つの方法のいずれかを使用します。
 - 適切な順序でのシャットダウン: ボールペンなどの細いもので、前面パネルにある電源ボタンを押して離します。ACPI (Advanced Configuration and Power Interface) が有効な OS では、これで適切な順序での OS シャットダウンが実行されます。ACPI が有効な OS を稼働していないサーバーは、即座にスタンバイ電源モードにシャットダウンされます。
 - 緊急シャットダウン: 電源ボタンを 4 秒間押し続けると、主電源がオフになりスタンバイ電源モードになります。

主電源がオフになると、前面パネルにある電源/OK LED が点滅を始め、サーバーがスタンバイ電源モードにあることを示します。



注意 – サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーの後面パネルから AC 電源コードを取り外します。

サーバーソフトウェアのセットアップ

この章では、サーバーのサービスプロセッサおよび Integrated Lights Out Manager のソフトウェアの初期セットアップの作業について説明します。この章では、次の項目について説明します。

- 「Integrated Lights Out Manager の概要」 (19 ページ)
- 「ILOM サービスプロセッサへの接続」 (21 ページ)
- 「プラットフォームオペレーティングシステムおよびドライバソフトウェアのセットアップ」 (29 ページ)

Integrated Lights Out Manager の概要

Sun™ Integrated Lights Out Manager (ILOM) ソフトウェアには、サーバーを管理する強力なツールがあります。

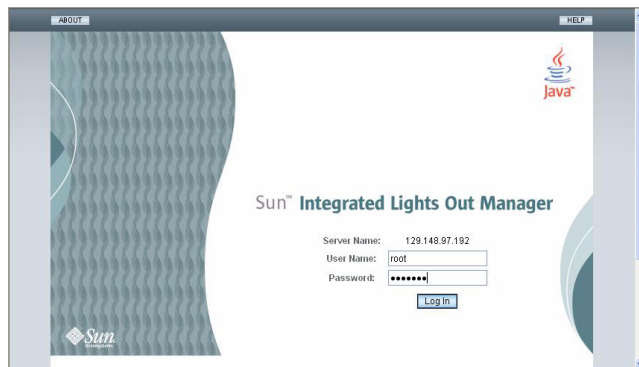


図 2-1 Integrated Lights Out Manager のログインページ

ILOM は、4 つのコンポーネントから構成されています。そのうちの 3 つのコンポーネントをホストサーバー上に、1 つをホストサーバーにアクセスするクライアントシステム上に配置します。4 つのコンポーネントは、次のとおりです。

- **ILOM SP ハードウェア:** サーバーには、次の機能を実行する Graphics Redirect and Service Processor (GRASP) が搭載されています。
 - ファン、ディスクドライブ、電源など、サーバーのフィールド交換可能なコンポーネントの状態と設定を監視します。
 - 外部の端末またはローカルエリアネットワーク (LAN) ヘシリアルまたはイーサネットに接続します。
- **ILOM SP ファームウェア:** GRASP ボードにプリインストールされている、システム管理ファームウェアアプリケーションのライブラリです。この ILOM ファームウェアは、オペレーティングシステムに依存しません。これらのファームウェアアプリケーションは、次のシステム管理インタフェースをサーバーに表示します。
 - Web ベースのグラフィカルインタフェース
 - Secure Shell (SSH) コマンドラインインタフェース
 - IPMI v2.0 コマンドインタフェース
 - シンプルネットワーク管理プロトコル (SNMP) v1、v2c、または v3 インタフェース

これらのインタフェースは、GRASP ボードで同じ基本システム管理機能呼び出すため、これらの ILOM インタフェースを 1 つ以上使用するよう選択して、データセンター内で実行している他の管理インタフェースと統合できます。

- **リモートコンソールアプリケーション:** リモートコンソールアプリケーションは階層化ソフトウェアの 1 つで、リモートクライアントがビデオコネクタに直接接続されているかのように、ホストサーバーのグラフィカルコンソールを表示できます。リモートコンソールは、サーバーの VGA ビデオコネクタからの 1024 x 768 出力のミラーです。リモートのキーボード、マウス、CD ドライブ、またはディスクドライブが標準の USB デバイスとして表示されます。

注 – クライアントシステム上にリモートコンソールアプリケーションは必要ありませんが、Web ブラウザと Sun Java™ ランタイム環境バージョン 5.0 以降をクライアントシステム上にインストールする必要があります。Java は <http://java.sun.com> から無料でダウンロードできます。

- **クライアント側の Secure Shell アプリケーション:** リモートの Secure Shell (SSH) から ILOM SP にアクセスするには、リモートのクライアントシステム (サーバー、ワークステーション、またはラップトップ) 上に Secure Shell 通信アプリケーションをインストールする必要があります。多くの Secure Shell 通信アプリケーションが、有償またはオープンソースで配布されています。オープンソースのクライアント側の SSH アプリケーションについては、<http://www.openssh.org> を参照してください。

サーバー上の ILOM ハードウェアやファームウェアには、現場で最も一般的な設定がデフォルトとして設定されています。これらのデフォルトを変更する必要はありません。

ILOM サービスプロセッサへの接続

ILOM SP に接続して、初期セットアップと設定を行う方法は 2 つあります。次の手順のいずれかを行ってください。

- 「シリアル接続を使用した ILOM への接続」(21 ページ)
- 「イーサネット接続を使用した ILOM への接続」(23 ページ)

シリアル接続を使用した ILOM への接続

この手順では、ILOM SP へのシリアル接続を確立し、ILOM の初期設定を行います。

注 – この手順は、本書の第 1 章に記載されているとおりに、ハードウェアの設置が完了し、サーバーにスタンバイ電源が適用されていることを前提としています。

1. ご使用の端末、ラップトップ、または端末サーバーが稼働していることを確認します。
2. 端末デバイス、あるいはラップトップまたは PC 上で実行しているターミナルエミュレーションソフトウェアを次のように設定します。
 - 8N1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1
 - 9600 ボー
 - ハードウェアのフローコントロール無効 (CTS/RTS)
 - ソフトウェアのフローコントロール無効 (XON/XOFF)
3. サーバーの後面パネルにある RJ-45 SERIAL MGT ポートからシリアルケーブルを端末デバイスに接続します。図 1-11 または図 1-12 を参照してください。
4. 端末デバイスで、Enter キーを押して、端末デバイスと ILOM SP との接続を確立します。

SP によって次のようなログインプロンプトが表示されます。

```
SUNSP0003BA84D777 login:
```

この例のログインプロンプトの意味は次のとおりです。

- 文字列 SUNSP はすべての SP に共通です。
- 0003BA84D777 は、特定の SP のイーサネット MAC アドレスです。このアドレスは各サーバーによって異なります。

5. ILOM にログインします。

a. デフォルトのユーザー名 (**root**) を入力します。

b. デフォルトのパスワード (**changeme**) を入力します。

正常にログインすると、SP にデフォルトのコマンドプロンプトが表示されます。

->

ここで CLI コマンドを実行し、ILOM でサーバーのユーザーアカウント、ネットワーク設定、アクセスリスト、警告などを設定できます。CLI コマンドの詳しい手順については、『Integrated Lights Out Manager (ILOM) 管理ガイド』(819-6808)』(819-1160) を参照してください。

CLI を使用した静的ネットワークの設定手順については、「[CLI を使用した静的 IP アドレスの設定](#)」(27 ページ) を参照してください。

6. シリアルコンソールを起動するには、次のように入力します。

```
cd /SP/console
```

```
start
```

注 – シリアルコンソールから SP CLI に戻るには、**Esc** (キーシーケンスを入力します)。

7. サーバーの設定後、「[プラットフォームオペレーティングシステムおよびドライバソフトウェアのセットアップ](#)」(29 ページ) に進みます。

イーサネット接続を使用した ILOM への接続

グラフィカルユーザーインターフェース (GUI) など、ILOM のすべての機能を使用するには、LAN をイーサネットポートに接続し、イーサネット接続を設定する必要があります。

ILOM は動的ホスト構成プロトコル (DHCP) と静的 IP アドレッシングをサポートしています。

- DHCP を使用した設定については、「[DHCP を使用した ILOM イーサネットの設定](#)」(23 ページ) を参照してください。
- 静的 IP アドレスを使用した設定については、「[静的イーサネット設定を使用した ILOM の設定](#)」(26 ページ) を参照してください。

DHCP を使用した ILOM イーサネットの設定

注 – この手順は、本書の第 1 章に記載されているとおりに、ハードウェアの設置が完了し、サーバーにスタンバイ電源が適用されていることを前提としています。

1. システム管理者に、DHCP サーバーが、新しいメディアアクセス制御 (MAC) アドレスを受け入れるように設定されていることを確認してください。
2. イーサネットケーブルをサーバーの RJ-45 NET MGT イーサネットポートに接続します。[図 1-11](#) または [図 1-12](#) を参照してください。

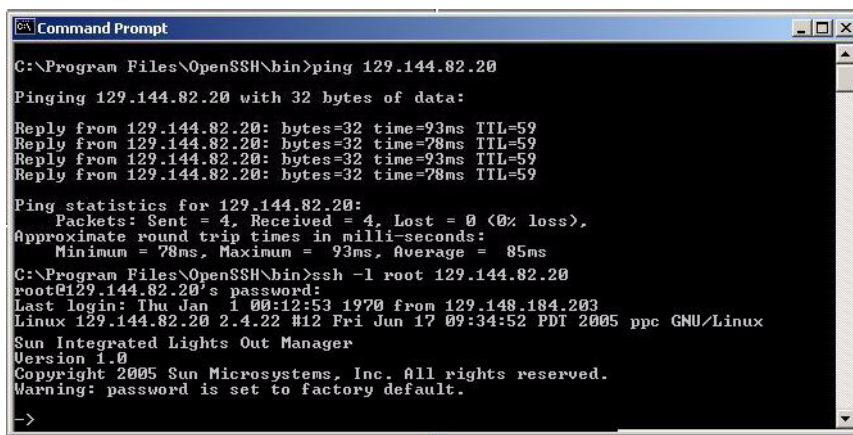
ILOM SP が静的 IP アドレスを使用していない場合は、MAC アドレスの ID を使用して DHCPDISCOVER パケットをブロードキャストします。LAN 上の DHCP サーバーは、IP アドレスなどの情報を含む DHCPOFFER パケットを返します。ILOM SP は、DHCP サーバーによって割り当てられた IP アドレスの「リース」状況を管理します。
3. 次のいずれかの場所から ILOM SP の IP アドレスを取得します。今後の参照のために、その IP アドレスを記録します。
 - CLI コマンド: SP には、端末デバイスを接続できるシリアルポートがあります。SP にログインし、CLI コマンド `show /SP/network` を入力すると、現在の IP アドレスが表示されます。
 - システムの BIOS セットアップ画面: ブートアップ中に F2 キーを押し、「Advanced (詳細)」→「IPMI 2.0 Configuration (IPMI 2.0 構成)」→「Set LAN Configuration (LAN 構成の設定)」→「IP address (IP アドレス)」を選択します。
 - DHCP サーバーのログファイル: この方法を使う場合は、次の **ステップ a** から **ステップ c** までを実行します。それ以外の場合は、**ステップ 4** まで進みます。

- a. 次のいずれかの場所から ILOM SP の MAC アドレスを調べ、メモします。
- CLI コマンド: SP には、端末デバイスを接続できるシリアルポートがあります。SP にログインし、CLI コマンド `show /SP/network` を入力すると、現在の MAC アドレスが表示されます。
 - お客様情報シート: サーバーに付属しています。
 - システムの BIOS セットアップ画面: ブートアップ中に F2 キーを押し、「Advanced (詳細)」→「IPMI 2.0 Configuration (IPMI 2.0 構成)」→「Set LAN Configuration (LAN 構成の設定)」→「MAC address (MAC アドレス)」を選択します。
- b. DHCP サーバーにログインし、DHCP ログファイルを確認します。

注 – これらのログファイルは、オペレーティングシステムや DHCP サーバーが異なると、保存先も異なります。DHCP システム管理者に相談して、ログファイルの正しいパスを探してください。

- c. ログファイルから、ILOM SP の MAC アドレスに対応する IP アドレスを特定します。
- 通常、DHCP ログファイルのエントリは、次のようにコンマで区切られたフィールドを持つ個別の行です。
- ID, Date, Time, Description, IP Address, Host Name, MAC Address*
- 正しい DHCP ファイルエントリの MAC アドレス (7 番目) フィールドで ILOM SP の MAC アドレスを探し、IP アドレス (5 番目) フィールドの対応する値を記録します。これは、ILOM SP のシステム管理ファームウェアアプリケーションにアクセスするのに必要な IP アドレスです。
4. **ステップ 3** で入手した IP アドレスを使用して ILOM SP とのセッションを開きます。CLI または GUI インタフェースを使用できます。
- ILOM SP CLI への Secure Shell (SSH) 接続を確立するには、SSH アプリケーションで適切な接続コマンドを入力します。たとえば、DHCP が割り当てた IP アドレス、129.144.82.20 を使用して SP に接続するには、次のコマンドを入力します。
- ```
ssh -l root 129.144.82.20
```
- デフォルトのユーザー名は **root** で、ssh コマンドに含まれていました。入力を求められたら、SP のデフォルトのパスワード **changeme** を入力します。その後、コマンドを入力してユーザーアカウントの管理やサーバー上のデバイスのステータスの監視を行うことができます。図 2-2 の例を参照してください。





```
C:\Program Files\OpenSSH\bin>ping 129.144.82.20
Pinging 129.144.82.20 with 32 bytes of data:
Reply from 129.144.82.20: bytes=32 time=93ms TTL=59
Reply from 129.144.82.20: bytes=32 time=78ms TTL=59
Reply from 129.144.82.20: bytes=32 time=93ms TTL=59
Reply from 129.144.82.20: bytes=32 time=78ms TTL=59
Ping statistics for 129.144.82.20:
 Packets: Sent = 4, Received = 4, Lost = 0 (0% loss),
 Approximate round trip times in milli-seconds:
 Minimum = 78ms, Maximum = 93ms, Average = 85ms
C:\Program Files\OpenSSH\bin>ssh -l root 129.144.82.20
root@129.144.82.20's password:
Last login: Thu Jan 1 00:12:53 1970 from 129.148.184.203
Linux 129.144.82.20 2.4.22 #12 Fri Jun 17 09:34:52 PDT 2005 ppc GNU/Linux
Sun Integrated Lights Out Manager
Version 1.0
Copyright 2005 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Warning: password is set to factory default.
->
```

図 2-2 SSH コマンドラインインタフェースを使用してセッションを開く

- ILOM Web GUI への接続を確立するには、ブラウザ検索ボックスに ILOM SP の IP アドレスを入力してから Enter キーを押します。たとえば、ILOM SP の IP アドレスが 129.144.02.20 の場合、図 2-3 に示すように入力します。最初の GUI ページでは、デフォルトのユーザー名 **root** とデフォルトのパスワード **changeme** の入力を求められます。

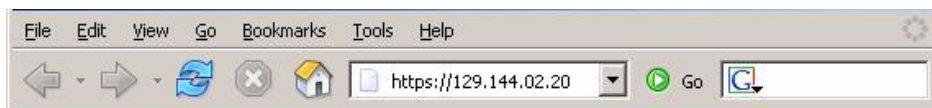


図 2-3 Web GUI を使用してセッションを開く

5. CLI または GUI でユーザー名とパスワードを入力した後、インタフェースを使用して ILOM SP を設定できます。

システムの詳しい設定手順については、『Integrated Lights Out Manager (ILOM) (819-6808)』(819-1160) を参照してください。

6. 「プラットフォームオペレーティングシステムおよびドライバソフトウェアのセットアップ」(29 ページ) に進みます。

## 静的イーサネット設定を使用した ILOM の設定

DHCP サーバーから ILOM SP に IP アドレスを割り当てる代わりに、静的 IP アドレスを割り当てることもできます。この設定には、Web GUI、ネットワークまたはシリアルポート経由の CLI、またはサーバーの BIOS セットアップユーティリティを使用できます。次の手順のいずれかを選択します。

- 「Web GUI を使用した静的 IP アドレスの設定」(26 ページ)
- 「CLI を使用した静的 IP アドレスの設定」(27 ページ)
- 「BIOS セットアップユーティリティを使用した静的 IP アドレスの設定」(28 ページ)

### Web GUI を使用した静的 IP アドレスの設定

1. 次のいずれかの場所から ILOM SP の現在の IP アドレスを特定します。
  - CLI コマンド。SP には、端末デバイスを接続できるシリアルポートがあります。SP にログインし、CLI コマンド `show /SP/network` を入力すると、現在の IP アドレスが表示されます。
  - システムの BIOS セットアップ画面。ブートアップ中に F2 キーを押し、「Advanced (詳細)」→「IPMI 2.0 Configuration (IPMI 2.0 構成)」→「Set LAN Configuration (LAN 構成の設定)」→「IP address (IP アドレス)」を選択します。
2. リモートシステム上で実行中の Web ブラウザを使用して、ILOM SP に接続します。
3. デフォルトのユーザー名 `root` とデフォルトのパスワード `changeme` を使用して、Web GUI にログインします。
4. 「Configuration (設定)」タブとその「Network (ネットワーク)」タブを選択して、ご使用の ILOM SP の現在のネットワーク設定に関する情報を表示します。図 2-4 を参照してください。
5. 「Use the Following IP Address (次のIPアドレスを使用する)」オプションをクリックして、静的 IP アドレスの情報を入力します。図 2-4 の例を参照してください。

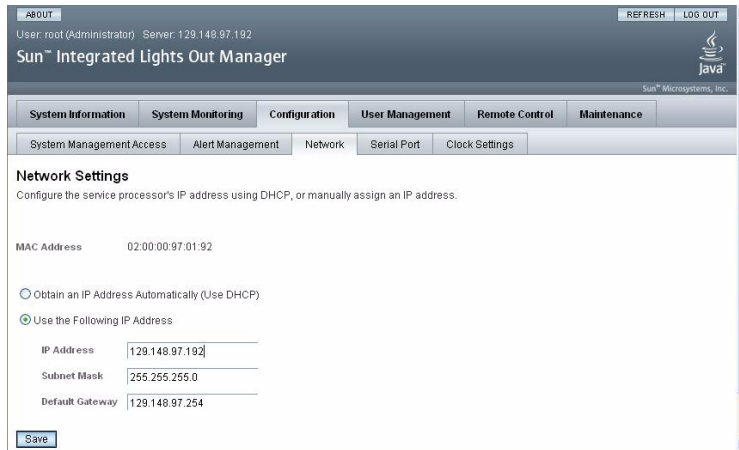


図 2-4 Integrated Lights Out Manager のネットワーク設定ページ

## CLI を使用した静的 IP アドレスの設定

1. SSH を使用するか、シリアルポートに接続して、CLI にログインします。  
ILOM CLI への Secure Shell (SSH) 接続を確立するには、SSH アプリケーションで適切な接続コマンドを入力します。たとえば、DHCP が割り当てた IP アドレス、129.144.82.20 を使用して SP に接続するには、次のコマンドを入力します。

```
ssh -l root 129.144.82.20
```

図 2-2 の例を参照してください。

2. 次の例の該当する箇所に自分のアドレスを使用して、次のコマンドを入力します。  
(次のコマンドに含まれるアドレスは例です)。

```
cd /SP/network
```

```
set pendingipaddress=129.144.82.26
```

```
set pendingipnetmask=255.255.255.0
```

```
set pendingipgateway=129.144.82.254
```

```
set pendingipdiscovery=static
```

```
set commitpending=true
```

## BIOS セットアップユーティリティを使用した静的 IP アドレスの設定

1. 電源投入時の自己診断テスト (POST) の間に F2 キーを押して、BIOS セットアップユーティリティに入ります。
2. BIOS のメインメニュー画面が表示されたら、「Advanced (詳細)」を選択します。
3. 「Advanced (詳細)」メニュー画面で、「IPMI 2.0 Configuration (IPMI 2.0 構成)」を選択します。
4. 「IPMI 2.0 Configuration (IPMI 2.0 構成)」画面から「LAN Configuration (LAN 構成)」を選択します。
5. 「LAN Configuration (LAN 構成)」画面で、「IP Assignment (IP 割り当て)」フィールドを「Static (静的)」に変更します。
6. 「IP Address (IPアドレス)」フィールドに静的 IP アドレスを入力します。  
サブネットマスクとデフォルトのゲートウェイ設定を対応するフィールドに入力することもできます。
7. 「Commit (コミット)」を選択し、Enter キーを押して、変更を実行します。
8. 「Current IP address in BMC (BMC の現在の IP アドレス)」フィールドに新しい静的 IP 設定を表示するには、「Refresh (リフレッシュ)」を選択し、Enter キーを押します。
9. 「Exit (終了)」メニュー画面が表示されるまで、右矢印キーを押す動作を繰り返します。
10. 「Exit (終了)」メニュー画面の説明に従って変更内容を保存し、セットアップユーティリティを終了します。

---

# プラットフォームオペレーティングシステムおよびドライバソフトウェアのセットアップ

ILOM SP のネットワークを設定した後、あらかじめインストールされている Solaris 10 オペレーティングシステムを設定するか、サポートされている Linux または Windows プラットフォームのオペレーティングシステムとドライバをインストールできます。

- プリインストールされた Solaris 10 オペレーティングシステムを使用する場合は、「[プリインストールされた Solaris 10 オペレーティングシステムの設定](#)」(35 ページ) を参照してください。
- サポートされている Linux や Solaris のオペレーティングシステムと、必要なドライバのインストールについては、『Sun Fire X4100 サーバーおよび Sun Fire X4200 サーバーのオペレーティングシステムインストールガイド』(820-0739) を参照してください。
- サポートされている Windows オペレーティングシステムと、必要なドライバのインストールについての詳細は、『Sun Fire X4100 サーバーおよび Sun Fire X4200 サーバーの Windows オペレーティングシステムインストールガイド』(820-0769) を参照してください。
- このサーバーに固有の OS に関するその他の注意点については、『*Sun Fire X4100 and Sun Fire X4200 Servers Product Notes* (Sun Fire X4100 サーバーおよび Sun Fire X4200 サーバーご使用にあたって)』(819-1162) または『*Sun Fire X4100 M2 サーバーおよび Sun Fire X4200 M2 サーバーご使用にあたって*』(820-0764) を参照してください。



## プリインストールされている Solaris 10 オペレーティングシステムの設定

---

この章では、サーバーにプリインストールされている Solaris™ 10 オペレーティングシステム (OS) の設定手順について説明します。出荷時にインストールされるバージョンは Solaris 10 6/06 以降です。

---

**注** - SPARC® システムとは異なり、サーバーの電源を入れてもプリインストールされた Solaris 10 イメージの出力はモニターに表示されません。プリインストールされたイメージは、サーバーに取り付けられたモニターではなく、シリアルコンソールに送られます。

---

---

### 開始前のご注意

プリインストールされた OS を設定する前に、次の作業を行う必要があります。

1. 「[ILOM サービスプロセッサへの接続](#)」(21 ページ) の手順に従って、サーバーの ILOM SP (Integrated Lights Out Manager サービスプロセッサ) の初期設定を行い、サーバーのネットワーク設定を決めます。
2. 「[インストールのためのワークシート](#)」(32 ページ) に示す設定に必要な情報を収集します。

# インストールのためのワークシート

表1のワークシートを使用して、プリインストールされた Solaris 10 OS の設定に必要な情報を収集します。収集するのはお使いのシステムのアプリケーションに該当する情報だけで十分です。

表1 インストールのためのワークシート

| インストールのための情報                        |         | 説明または例                                                                                        | 回答:<br>デフォルトはアスタリスク (*) で示されます。                                                            |
|-------------------------------------|---------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 言語                                  |         | Solaris ソフトウェアに使用できる言語をリストから選択します。                                                            | 英語*                                                                                        |
| 地域                                  |         | サポート対象の地域のリストから自分の地域を選択します。                                                                   | 英語 (C - 7-bit ASCII) *                                                                     |
| 端末                                  |         | 使用可能な端末タイプのリストから、使用している端末のタイプを選択します。                                                          |                                                                                            |
| ネットワーク接続                            |         | システムはネットワークに接続されていますか?                                                                        | <ul style="list-style-type: none"> <li>ネットワークに接続されている</li> <li>ネットワークに接続されていない*</li> </ul> |
| DHCP                                |         | ネットワークインタフェースの設定に DHCP (Dynamic Host Configuration Protocol) を使用できますか?                        | <ul style="list-style-type: none"> <li>はい</li> <li>いいえ*</li> </ul>                         |
| DHCPを使用していない場合、ネットワークアドレスを記載してください。 | IP アドレス | DHCP を使用していない場合、システムにIPアドレスを割り当てます。<br>例: 129.200.9.1                                         |                                                                                            |
|                                     | サブネット   | DHCP を使用していない場合、システムはサブネットの一部ですか?<br>システムがサブネットの一部である場合、サブネットのネットマスクを入力します。<br>例: 255.255.0.0 | 255.255.0.0*                                                                               |
|                                     | IPv6    | このマシンで IPv6 を有効にしますか?                                                                         | <ul style="list-style-type: none"> <li>はい</li> <li>いいえ*</li> </ul>                         |
| ホスト名                                |         | システムに指定したホスト名                                                                                 |                                                                                            |



表 1 インストールのためのワークシート (続き)

| インストールのための情報                                 |            | 説明または例                                                                                                                                | 回答:<br>デフォルトはアスタリスク (*) で示されます。                                                                                       |
|----------------------------------------------|------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Kerberos                                     |            | このマシンで Kerberos セキュリティを設定しますか?<br>設定する場合、次の情報を収集してください。<br>デフォルト Realm:<br>管理サーバー:<br>第 1 KDC:<br>(省略可) その他のKDC:                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>• はい</li> <li>• いいえ*</li> </ul>                                                |
| ネームサービス:<br>システムでネームサービスを使用する場合は、次の情報を指定します。 | ネームサービス    | このシステムで使うネームサービスを入力してください。                                                                                                            | <ul style="list-style-type: none"> <li>• NIS+</li> <li>• NIS</li> <li>• DNS</li> <li>• LDAP</li> <li>• なし*</li> </ul> |
|                                              | ドメインネーム    | システムが含まれているドメインの名前を入力します。                                                                                                             |                                                                                                                       |
|                                              | NIS+ と NIS | 自分でネームサーバーを指定しますか、あるいはインストールプログラムによって自動的に指定しますか?                                                                                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>• IP アドレスを指定</li> <li>• 自動的に指定*</li> </ul>                                     |
|                                              | DNS        | DNS サーバーの IP アドレスを入力します。少なくとも 1 個は必ず入力してください (最高 3 個)。<br><br>DNS の問い合わせ時に検索するドメインのリストも入力できます。<br><br>検索ドメイン:<br>検索ドメイン:<br>検索ドメイン:   |                                                                                                                       |
|                                              | LDAP       | LDAP プロファイルについて次の情報を入力します。<br>プロファイル名:<br>プロファイルサーバー:<br>LDAPプロファイルにプロキシ認証レベルを指定する場合、次の情報を記載してください。<br>プロキシバインド識別名:<br>プロキシバインドパスワード: |                                                                                                                       |

表 1 インストールのためのワークシート (続き)

| インストールのための情報 | 説明または例                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               | 回答:<br>デフォルトはアスタリスク (*) で示されます。                                                                     |
|--------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| デフォルトルート     | <p>自分でデフォルトルート IP アドレスを指定しますか、あるいは Solaris インストールプログラムによって自動的に指定しますか?</p> <p>デフォルトルートは、2つの物理ネットワーク間でトラフィックを転送するブリッジの役目を果たします。IP アドレスは、ネットワーク上の各ホストを識別する固有の数字です。</p> <p>次のようなオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 自分で IP アドレスを指定できます。指定された IP アドレスを使用して、<code>/etc/defaultrouter</code> ファイルが作成されます。システムのリポート時に、指定した IP アドレスがデフォルトのルートになります。</li> <li>• Solaris インストールプログラムを使用して、IP アドレスを検出できます。ただし、ICMP ルータディスカバリプロトコルを使用してそれ自身を公開するルータのあるサブネット上にシステムがあることが必要です。コマンドラインインタフェースを使用する場合、システムのブート時に IP アドレスが自動的に検出されます。</li> <li>• この時点でルータを使用していないか、ソフトウェアによって IP アドレスを検出しない場合には、「なし」を選択することもできます。ソフトウェアは、リポート時に IP アドレスを自動的に検出しようとします。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>• IP アドレスを指定</li> <li>• IP アドレスを検出</li> <li>• なし*</li> </ul> |
| 時差           | デフォルトの時差を指定する方法を選択してください。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 地域*</li> <li>• GM からのオフセット</li> <li>• 時差ファイル</li> </ul>    |
| ルートパスワード     | システム用のルートパスワードを選択します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |                                                                                                     |

---

# プリインストールされた Solaris 10 オペレーティングシステムの設定

---

**注** – この手順を実行する前に、サービスプロセッサの設定を実行する必要があります。まだ設定していない場合は、「[開始前のご注意](#)」(31 ページ) を参照してください。

---

設定時は、「[インストールのためのワークシート](#)」(32 ページ) で収集した情報を使用します。

ILOM SP を設定した後、別のシステムからサーバーに接続し、プリインストールされた Solaris 10 オペレーティングシステム (OS) を設定するか、Linux または Windows プラットフォームのオペレーティングシステムをインストールできます。その方法には次の 2 通りがあります。

- 「[サービスプロセッサの IP アドレスを使用したサーバーとの接続](#)」(36 ページ)  
この方法を行う場合は、最初にサービスプロセッサの IP アドレスを決定する必要があり、サーバーはネットワークに接続する必要があります。
- 「[シリアルキャプチャプログラムを使用したサーバーとの接続](#)」(38 ページ)  
この方法を行う場合は、サービスプロセッサの IP アドレスを決める必要はありませんが、サーバーとシリアルキャプチャホストシステムのシリアルポート間のケーブル接続が必要になります。
- サポートされている Linux または Windows の OS と必須ドライバをインストールする場合は、『Sun Fire X4600 サーバーオペレーティングシステムインストールガイド』(819-6806) を参照してください。このドキュメントでは、メディアから Solaris オペレーティングシステムをインストールする手順についても説明しています。
- このサーバーに固有の OS に関するその他の注意点については、『Sun Fire X4100 and Sun Fire X4200 Servers Product Notes (Sun Fire X4100 サーバーおよび Sun Fire X4200 サーバーご使用にあたって)』(819-1162) または『Sun Fire X4100 M2 サーバーおよび Sun Fire X4200 M2 サーバーご使用にあたって』(820-0764) を参照してください。

# サービスプロセッサの IP アドレスを使用した サーバーとの接続

---

**注** – この手順は、サーバーがすでにイーサネットケーブルによってネットワークに接続されていることを前提としています。

---

1. サーバーがイーサネットケーブルによって接続されていない場合は、サービスプロセッサの IP アドレスを設定する必要があります。
  - a. 前面パネルにあるくぼんだ電源ボタンを先の尖ったもので押して、プラットフォームの電源を入れます。  
OS のブート時に、POST メッセージが画面に表示されます。
  - b. 電源投入時の自己診断テスト (POST) の間に F2 キーを押して、BIOS 設定ユーティリティを初期化します。
  - c. BIOS のメイン画面が表示されたら、「Advanced (詳細)」を選択します。
  - d. 「Advanced (詳細)」画面が表示されたら、「IPMI 2.0 Configuration (IPMI 2.0 構成)」を選択します。  
「IPMI 2.0 Configuration (IPMI 2.0 構成)」画面が表示されたら、「LAN Configuration (LAN 構成)」メニュー項目を選択します。
  - e. IP アドレスメニュー項目を選択します。  
サービスプロセッサの IP アドレスが次のフォーマットで表示されます。  
Current IP address in BMC: xxx.xxx.xxx.xxx
2. クライアントシステムを使用して、サービスプロセッサの IP アドレスと Secure Shell (SSH) 接続を確立します。  

```
ssh -l root <sp_ip_address>
```
3. サービスプロセッサに管理者としてログインします。たとえば、次のように入力します。  
login: **root**  
password: **changeme**
4. 次のように入力して、ILOM コンソールモードを開始します。  

```
start /SP/console
```

管理者権限のあるアカウントだけが、SP シリアルポートの設定を実行できます。
5. SP シリアルポートのデフォルト設定を変更した場合は、必ずデフォルト設定にリセットしてください。
6. Solaris 10 のプリインストール画面に表示される指示に従います。

7. 指示に対してシステムとネットワークの情報を入力するときに、「インストールのためのワークシート」(32 ページ) で収集した情報を使用してください。

表示される画面は、ネットワーク情報をサーバーに割り当てるために選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって異なります。

システム構成情報を入力すると、サーバーのブート処理が完了し、Solaris のログインプロンプトが表示されます。

## コンソール出力のビデオポートへのリダイレクト (省略可)



---

**注意** - この手順は Solaris の上級ユーザーのみを対象としています。bootenv.rc ファイルを誤って変更すると、サーバーの正常な動作が大きく阻害されたり、サーバーがブートできなくなる可能性があります。

---

前述の手順を完了して SP にログインするときに、コンソールの出力をビデオポートにリダイレクトするには、次の引数を使用してプロンプトで eeprom コマンドを実行します。

```
eeprom output-device=screen
eeprom input-device=keyboard
```

# シリアルキャプチャプログラムを使用したサーバーとの接続

1. ケーブルを使用して、サーバーのシリアルポートとシリアルキャプチャホストシステムのシリアルポートを接続します。
2. システムのシリアルポートの通信プロパティがデフォルトに設定されていることを確認します。

デフォルト設定は、9600 ボー、8N1 (データビット 8、パリティなし、ストップビット 1)、フローコントロール無効です。

3. 端末セッションを開始して、シリアルポート出力をキャプチャします。

クライアントで動作する Solaris OS で、次のように入力します。

```
$tip -9600 /dev/ttya
```

クライアントで動作する Windows、Hyperterminal などのプログラムを起動します。

クライアントで動作する Linux で、Minicom などのプログラムを起動します。

Minicom は Linux ディストリビューションに含まれている、テキストベースのシリアル通信プログラムです。詳細については、Linux ディストリビューションに含まれるマニュアルページを参照してください。

4. サービスプロセッサに管理者としてログインします。たとえば、次のように入力します。

```
login: root
password: changeme
```

5. 次のように入力して、ILOM SP GUIを開始します。

```
start /SP/console
```

6. 前面パネルにあるくぼんだ電源ボタンをボールペンなど先の尖ったもので押して、サーバーの電源を入れます。

OS のブート時に、POST メッセージが画面に表示されます。

7. Solaris 10 のプリインストール画面に表示される指示に従います。

8. 指示に対してシステムとネットワークの情報を入力するときに、「[インストールのためのワークシート](#)」(32 ページ) で収集した情報を使用してください。

表示される画面は、ネットワーク情報をサーバーに割り当てるために選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって異なります。

システム構成情報を入力すると、サーバーのブート処理が完了し、Solaris のログインプロンプトが表示されます。

## Solaris 10 ユーザーマニュアル

次の Web サイトで、Solaris 10 OS の各種ユーザーマニュアルを参照できます。

<http://docs.sun.com/app/docs/prod/solaris.10>

特に、次の Web サイトでは「Solaris 10 OS Release and Installation Collection (Solaris 10 OS リリースおよびインストールコレクション)」にアクセスできます。

<http://docs.sun.com/app/docs/coll/1236.1>

## Solaris 10 ソフトウェアのダウンロード

Solaris 10 OS を削除後に再インストールする必要がある場合は、CD または DVD イメージをダウンロードすることができます。

- CD イメージをダウンロードするには、次の Web サイトを参照してください。

<http://javashoplmsun.com/ECom/docs/Welcome.jsp?StoreId=8&PartDetailId=Sol10-hw1-x86-G-F&TransactionId=try>

- DVD イメージをダウンロードするには、次の Web サイトを参照してください。

<http://javashoplmsun.com/ECom/docs/Welcome.jsp?StoreId=8&PartDetailId=Sol10-hw1-x86-DVD-G-F&TransactionId=try>

## Solaris 10 OS のトレーニング

Sun は、お客様のスケジュールと学習スタイルに合わせて柔軟に対応可能なトレーニングを実施しています。講師によるクラス、Web ベースのオンラインのクラス、CD-ROM とライブ仮想クラスなどのオプションがあります。Solaris 10 のトレーニングおよび認定オプションの一覧については、次のサイトを参照してください。

<http://www.sun.com/training/catalog/solaris10.html>





# 索引

---

## C

CMA アセンブリ 7

## I

ILOM

イーサネットの設定 23

概要 19

クライアント側の Secure Shell 20

サービスプロセッサハードウェア 20

サービスプロセッサファームウェア 20

シリアルで設定 21

静的イーサネットの設定 26

ソフトウェアコンポーネント 20

リモートコンソールアプリケーション 20

Integrated Lights Out Manager → 「ILOM」  
を参照 19

## O

OS のインストール、参照先 29

## い

イーサネット接続、サービスプロセッサ 23

## か

概要、設置 1

## き

緊急シャットダウン 17

## く

クライアント側の Secure Shell 20

## け

ケーブル 13

ケーブル管理アセンブリ 7

## こ

後面パネルケーブルコネクタ 13

後面パネルの設置 13

コネクタ、後面パネル 13

## さ

サービスプロセッサ

イーサネットの設定 23

シリアルで設定 21

ハードウェア 20

ファームウェア 20

## し

主電源、適用 16

シリアル接続、サービスプロセッサ 21

## す

スタンバイ電源、適用 15

スライドレールの取り付け 3

## せ

静的イーサネットで設定 26

製品アップデート vi

設置の概要 1

## て

適切な順序でのシャットダウン 17

### 電源

主電源の投入 16

スタンバイ電源の投入 15

電源切断 17

電源のシャットダウン 17

## と

取り付け、ラックへ 2

ドライバアップデート vi

## ふ

ファームウェアアップデート vi

## ら

ラックへの取り付け 2

## り

リモートコンソールアプリケーション 20